

## シンポジウム

### ホスピタリティの行方

#### —— 日本社会の対外観、対外対応について ——

日時：2015年11月2日（月）13:00～16:30

場所：世田谷キャンパス 34号館 B302 教室

コーディネーター：梶原 景昭、大森 節夫

総合司会：大森 節夫（国土館大学 21世紀アジア学部）

#### 「開会挨拶」

柴田 徳文（国土館大学 アジア・日本研究センター長）

#### 「趣旨説明」

梶原 景昭（国土館大学 21世紀アジア学部）

「日本における難民への対応について——おもてなし、あるいは憎悪の源泉？」

田中 恭一（(財)トヨタ財団）

#### 「ホスピタリティとライフスタイル」

安東 徳子（株式会社エスプレシーボ・コム 代表取締役）

#### 「茶道におけるおもてなしの意義」

泉水 祐子（裏千家）

#### 「スポーツにおける性的マイノリティ」

松宮 智生（国土館大学 体育学部）

「ホスピタリティとは？（学習すべき対象、あるいは既に持ち合わせているもの?）」

ウルサ・テスリッチ・コージイ（Infuzija d.o.o. 代表取締役）

#### 「ディスカッション」

#### 「閉会挨拶」

梶原 景昭

#### 「開会挨拶」柴田徳文センター長

今回、アジア・日本研究センターのプロジェクトの一環で、ホスピタリティについてシンポジウムが催されるということは誠に喜びでございます。実は、このホスピタリティというのは国土館大学あるいは学校法人国土館にとって非常に重要なテーマであります。国土館では再来年迎える100周年を記念していろいろな行事が計画されておりました、その中でも中心なのがこのプロジェクト

であろうと考えております。というのは、国士館の始まりが実にホスピタリティであるからです。

百十何年前、創立者がまだ13歳の折に家が破産し財政的な援助無しに苦学して、その中で生きるために非常に辛い思いをして自殺を考えたそうです。ところが当時はあまり電車が走っておりませんので、山手線の線路に寝そべっても電車が轢かれることはありませんでした。夜、電車が通るのを待って線路を枕に空を見ましたら、満月が上がっていて、その満月が郷里にいる母親の顔に見えたそうです。お母さんはいつも息子のことを心配して手紙をくれておりました。そういうふうに分身のことを思いやってくれている人間がいたことに気づいて、母の持つ思いやりの心を世の中に広げていったら、もっともっと住みやすい世界ができないだろうか。人生が辛いからと死んでいる場合ではない、それよりも皆をもっと助けることをしなくちゃいけない、ということで始めた「思いやり会」が成長し、国士館の始まりとなりました。

他人を思いやり、我が身よりも人のことを考える心、これが国士館のモットーであります。4つの言葉、誠意、勤労、見識、気魄という言葉がありますけれども、最初が「誠意」つまり真心なのです。真心を英語で、ホスピタリティと申します。まさしく創立100年のこの時期に、国士館一番の真髓を教えていただく、誠に意義深いシンポジウムです。先生方、貴重なお話を期待しております。

#### 「趣旨説明」梶原景昭

ホスピタリティは日本ではほとんどおもてなしと同義にされることが多いと思いますが、皆様ご承知のように東京オリンピック・パラリンピック招致の最終会場でおもてなしというキーワードが大変受けて、社会的なインパクトが強まりました。もうちょっと遡れば、四国巡礼では接待という言葉がございます。巡礼者に対して近隣のコミュニティに住んでいる方がお茶やお菓子を出すことは慣行として長い間行われていました。それから「鉢木」という能の演目は、ホスピタリティの典型的な話です。これに留まらず、オリンピック招致でおもてなしという言葉が日本人の耳にすんなり入ってきたのには、例えば有名旅館の女将のおもてなしなど、ここ十年ぐらい我々の認識として広まっていたことがあると思います。

今申し上げたような、日本の文化あるいは産業でも、総じてホスピタリティと言っているような現象が色濃く起っています。日本はおもてなし大国ですが、一方でホスピタリティに関する最近10年間くらいの政治哲学や哲学、社会学の議論を聞いておきますと、だいぶ様相が違います。例えば、難民や移民、外国人をどう受け入れるか、あるいは国外だけでなく国の中でも、民族的少数者、社会的弱者など、いろいろな意味で少数者の人々に対する対応が日本社会では非常に消極的です。もてなしを長い伝統として育ててきた社会でありながら、他者に対してどのくらい開かれた社会になっているかということが大きな問題として浮上してきます。

例えばジャック・デリダが、異人や難民、移民の受け入れについて相手の名前を聞くこと無しにその人を受け入れる絶対的ホスピタリティということを言っています。そしてヨルダンに住んでいるベドウィンが、文化人類学の調査に対してほぼ同様のことを表明しています。例えばゲストに対して、何処の誰かを問うこと無く引き受け、ゲストは食べ物や飲み物、あるいは夜寝る場所を自然に提供される。翌朝、朝ごはんを食べて、また晩飯を食べるかとか聞かれる事もある。ゲストに対してホスト側は、ゲストを遇することがホストの荣誉であると考えて、殆ど無償の行為として行うということです。先ほど述べたホスピタリティ産業の中にも、近い考え方があります。社会哲学者の

山本哲士さんが、マニュアルがあって、誰にでも同じ事をするのがサービスであると言っています。

ホスピタリティにはマニュアルがありません。相手によって変わらないと、ホスピタリティになりません。ホスピタリティとは、産業的にも民族的にも相手の希望をなるべく満足させることです。ホスピタリティをホストとゲストの関係としてもう一度まとめると、いいホストだけでなく、いいゲストであるのも大変なことです。自分自身の例を引けば、人の家に泊まるというのは相手の意も汲まなきゃいけませんから、自由にはならないわけです。それは逆にホストもそうです。アラブの例でよく出てくるのは、先ほど申し上げたように名前も聞かない、素性も確かめないというアラブの伝統的接待の習慣に則って客を受け入れなければいけないわけですから、受け入れたお客が実は強盗で、家人が寝静まると起きて来て財貨を奪って皆殺しにして逃げてしまうという話が、現実にも起こったかもしれませんが、物語としてたくさん残っております。そうすると、ホスピタリティというのは、場合によってはホストとゲストの間に極めて高い緊張関係があって、必ずしも一方的に穏やかな平和的な関係が残るというものでもないと考えられます。

本日はそれぞれご専門のお立場からお話しただくわけですが、このプロジェクトを6年ぐらいやらせていただいて、ホスピタリティという概念について、まだ深いところに行き着いていません。多様性や多元性、あるいは他者をどう承認するかという問題は、日本に限らずどの社会も抱えています。生産や消費の面でもニーズが多様化し、大量生産大量消費の時代は終わりつつあります。大学でもホスピタリティ型を目指す必要がいられています。難問ですからすぐに解決するとは思いませんが、来たるべき社会モデルを創生していけたらいいと思います。

最後に、私の個人的な経験から、ホスピタリティ溢れる経験というのは、持たざる者がその限られた資源を与えて下さるといって現れることの方が多かったのではないのでしょうか。アメリカ人の旅行記などを読みますと、フィリピン人がいかにホスピタブルかというのを書いています。アメリカに比べて、物質的にはフィリピンの田舎に住んでいる農民の方が貧しいわけで、その貧しい方が「客人」という（主人である）アメリカ人に対してホスピタリティを発揮している。主客が逆転するような形になりますけれども、マジョリティがホスピタブルである事は意外と難しい。マジョリティの仕事はホスピタリティでは無く、再分配やフィランソロピーなのかも知れません。これにはどうも繋がりがありそうで、その辺はこれからの課題とさせていただきます。

#### 「日本における難民への対応について ——おもてなし、あるいは憎悪の源泉？」 田中恭一

よろしくお願ひ致します。最初に、難民の定義をご紹介します。難民が国際社会の中で定義されたのは1954年で、それ程古い話ではないと思います。日本における難民問題は4世紀頃、百済からの避難民が起源です。日本は島国ですが非常に早い時期から関わっていたことに驚きます。それともう一つ、日本が鎖国していた江戸時代に、出島のオランダ商人が日本に滞在している間に本国がフランスに戦争で負けて国が無くなってしまいます。鎖国をして外国との関係が無い中にありながら、日本はその時にも難民問題に巻き込まれていたという事です。最近では、特にベトナム戦争が終結してしばらく後、いわゆるボートピープルとしてインドシナからの難民を大量に受け入れるという事がありました。同時に難民と偽って日本に入国した人が多く、これ以降、日本政府が難民認定の基準を厳しくしたため、現在では日本では難民認定が認められにくいという状況が続いてい

るようです。

さてヨーロッパは、まさにその難民問題が現在おきていて、最近のウォールストリートジャーナルの記事を紹介致しますと、アフガニスタン、シリアから数十万規模の難民がヨーロッパに流れてきているそうです。

ところで、ホスピタリティとは狭義と広義の定義があって、先ほどの梶原先生のお話にも関係しますが、広義の定義の方はゲストとホストの二者間の話に留まらないということのようです。同じホスピタリティでも、日本の場合はおもてなしという感じで、1対1対応になっているところがあると思います。今年5月の日本経済新聞で、日本の観光競争力が世界9位という事で、特に客の待遇の項目で首位となるなど、日本のおもてなしは非常に高い評価を受けているようです。もう一つ海外から見て、よく言われるのが日本は安全な国だということです。ゴミが無いとか、トイレがキレイだとか、特に安全な国という事で、そこに先ほどのおもてなしが重なれば本来無敵ですが、実はそうならないように感じております。

昨年も5,000人の方が日本への難民申請をしたにも関わらず、承認されたのはたった11人。これは非常にショッキングな事実です。最近の朝日新聞でも、今年も既に5,500人くらいの方が申請しているけれども、あまり認定が成されないというようなニュースが紹介されていました。

また、日本における外国人の置かれている現状についても、ご存知じゃない方も多いようなのでご紹介します。先日、NHK出版の新書「ニッポン異国紀行」を書かれた石井光太さんのお話を拝聴する機会がありました。石井さんの本を拝読させていただきましたが、アジア系の外国人が置かれている現状についてかなり同情しながら、多くの人たちにそうした事実を知ってもらいたいという姿勢を強く感じました。当著書では、遺体の冷凍空輸だとか、韓国系教会のホームレス支援ですとか、夜逃げ保証付きの結婚紹介所でのエピソード等々のアジア系外国人が生きているために必死な様子が生々しく描かれています。でも、社会的弱者の地位からなかなか這い上がることができない、ということが本の扉で紹介されています。正直、この本を読む限り、多文化社会としては、日本は不十分な国であると思いました。

また、この本の「あとがき」でタイの女性が、著者の石井さんにこう語っております。「私、今夜、グチばかり言っちゃったらごめんね。けど、日本が嫌いなわけじゃないの、むしろ大好き。私、人生の半分以上日本で暮らしてきた。心は日本人と一緒に。だから、この国がもっともっと良くなって貰いたいし、良くしていきたい。本当にそう思っているよ。だから毎日どうすれば良くなるかって考えているのよ」と。日本人は日本を日本人だけのものだと思っているけど、その社会の底辺で必死に生きている外国の人がこんなふうに関心を持って日本を良くしようと考えているのなら、やっぱり彼女たちにもオーナーシップは認められるべきではないかと、私も思いました。

ヨーロッパの一部の国の一部の若者にとっては、難民は自分たちの職を奪うライバルというか、何となく邪魔なものです。日本ではそういった危機感は無く、むしろ存在すら意識していません。多文化社会を考える時、石井さんが「もう日本は日本人だけのものじゃない」と書いているのは、そういった「日本人は外国人に対して無関心」であるという問題点を指摘しているように思います。

一方で、日本も捨てたものじゃないと思う事もあります。難民支援協会は、5,000人の難民申請に対して11人しか認めないようなところを何とか変えていこうという活動をしている民間の支援団体です。その難民支援協会のホームページの中で、日本は外国人に対して非常に無関心で、どう

やって感心を持ってもらえるのかといったことを紹介しています。これを見ると、我々ももう少し外国人に関心を払うべきじゃないかなという気がします。

困っている人に可能な限りのケアをすることは、人間として当たり前のことですが、自分の生活もままならないのに人のためにお金を出せとは誰も言えません。それでも、解決してあげることが出来ないかもしれないけれども、傾聴ボランティアで何か困っていることはないか寄り添って聞いてあげることが出来ます。

難民問題について考える際に、江戸時代に封鎖していたにも関わらず難民問題に巻き込まれていたように、国際社会の現代日本は実際にもう巻き込まれていることを認識すべきです。ですから、日本は観光でハイクオリティなホスピタリティを示すだけでなく、今ヨーロッパで起こっていることに対しても、何が出来るのかということを見問自答する必要があると思います。

最後に結論めいたことを言わせていただきますと、外国人に対して自分たちの問題として想像力を働かせて受け入れる姿勢が求められていると思います。今、日本のホスピタリティが評価されつつも何か欠けていることについては、自分の問題として考えていくような想像力みたいなものがさらに加われば解決するのかもしれないと思います。以上で終わらせていただきます。

#### 「ホスピタリティとライフスタイル」安東徳子

「ホスピタリティとライフスタイル」という副題でお話をさせていただきたいと思います。サービスビジネスコンサルタントという職業は、所謂ホスピタリティ産業における仕事です。接客をする方たちのコンサルテーションとか、人材研修を中心にしておりまして、まさにホスピタリティを使ってお客様とどのように対峙していくかが私の仕事の基本になっております。

対外国に対して私たち日本人は、どういったポジションにいるのかということを見問自答する4つのマトリックス「海外で外国人に対応を受ける」「海外で外国人に対応する」「国内で外国人に対応する」「国内で外国人に対応を受ける」にまとめました。70年代に、変動相場になってから日本人は海外に行くようになりました。そこで最初に経験したのが、海外旅行に行くとかホームステイするといった、海外で何かをしてもらう経験です。そのうちに今度は海外にビジネス出張に行くようになりました。提供側として海外の外国人に対応することで、当時、Japan as No.1という言葉がありましたが、日本人が対外国の活動を一番頻繁に行った頃です。ところが、バブルが弾けて不景気が来た後、日本人は対外国に対してあまり活動しなくなりました。昨今では、私は海外旅行嫌いだから英語が出来なくてもいいと言っても、嫌でも対外国に対峙する状況になっています。先ほどの田中先生のお話にあった難民の受け入れもここに当たるのかも知れません。

そして、国内で外国人に対応を受けるというのも、今は中国人のマンションのオーナーがたくさんいらっしゃいます。だから不動産を借りようと思うと、中国の方と契約書を交わすこともあるわけですね。そういうふうには世界はどんどん変わっていて、対外国への対応は避けられない時代に来ています。

あらためて、上記の4つのマトリックスを考えてみますと、国内で外国人に対応するというところで、例えばイスラムの問題です。あるレストランで何かの会議があってイスラム教の方がいらっしゃるとします。ホスピタリティ溢れるシェフなら、「イスラムの方がいらっしゃるなら喜んで下さるお料理を提供しよう」と思って、ポークレスのお料理を作ります。ところがその方は召し上が

りません。イスラム教にとってポークは不浄の動物、汚れた存在です。ですから召し上がらないどころか、ポークが料理されたことのあるお鍋、ポーク料理が乗ったことのあるお皿に触れた食物はもう食べることができないわけです。相手に対してどんなにホスピタブルな行動をしようとしても、その文化の本質を知らない限り何もできない。これが私たちに求められている、国内で外国人に対応することの大きな問題です。

国際化に向けて、生活習慣に関わる視点からホスピタリティを少し紐解いて行きたいと思います。カフェでお客様に「水をください」と言われました。すると、ある人はすぐに水を出します。しかし、ある人は Why water ? 何で水なのだろう? と考えます。この Why water ? と考える人、ここにホスピタリティを育む何かがあります。

喉が渴いているのかもしれない、大概はこう思うわけです。でも、もしかしたら薬が飲みたいのかも知れない。あるいはダイエットをしているのかも、コーヒー飲む前に水を飲むと健康に良いからかも、節約中なのでお水を貰うという人もいるでしょう。あるいはカフェの女の子と話をする口実、卒業論文のテーマでカフェの水質検査をしている学生さん、切手を貼るために水が欲しい、尿路結石で大量の水を飲む必要があるのかもしれない。急いでいるので熱いコーヒーを冷ますためかも知れません。これを、一つの問いかけに関して瞬時にして仮説を立てる水平思考能力と言います。

そうすると、例えば薬が飲みたいならば、氷を入れた水は相応しくありません。あるいは切手を貼る水が欲しいのであれば、コップに入れたお水ではなく、緩く絞ったおしぼりをお皿に乗せて、それとは別に飲むためのお水を添えるほうがいいでしょう。このように限りなくパーソナルな対応こそが、サービスではなくホスピタリティです。

よく言われる、ホスピタリティは自分がしてもらいたいことをしてあげなさいと言うのは真っ赤な嘘ですね。自分がしてもらいたい事が、隣の人がしてもらいたい事とは限りません。そこで、他人がしてもらいたい事を探るのが、この水平思考能力です。そしてこの水平思考能力は、瞬時にこれぐらいの仮説を立てられない限り、恐らく目の前のお客様に該当する内容を探し当てることは出来ないのです。

水平思考能力を鍛えるためには、英語が喋れる、中国語が喋れるだけではなくて、海外に行っただけでもダメですね。その文化をしっかりと見て背景を見てくる、経験をしてくる、人と話をしてくる、その文化への深い理解が無い限り、ホスピタリティは発揮されないわけです。特に、対外国に対してのホスピタリティというのは発揮されません。文化の理解、生活様式の理解が、今後、対外国に対しての日本のホスピタリティを上げていくのに一番大切なことだと思います。国際化とは、生活様式の理解であって、それはそもそも自分たちとは生活様式が違うに違いないという仮説能力から産まれます。ホスピタリティは、70 億人引く一人の人を嫌な気持ちにさせないことです。

自分以外の全ての人がホスピタリティの対象であるという考え方、これがもっと普及していくと、先ほどの難民の考え方という事も、一つひとつ解決の方向に向かう可能性があると言えます。だから私たちは、これからホスピタリティを高めていく時に、一つひとつのサービスが何故この人に必要なのか、その文化的背景等を踏まえながら理解する事が一番求められます。短い時間ではごさいましたが、「ホスピタリティとライフスタイル」というタイトルでお話をさせて頂きました。ご清聴ありがとうございました。

### 「茶道におけるもてなしの意義」 泉水祐子

私は450年以上前の千利休のもてなしの心得をお話しながら、時代も生活習慣も全く違う現代で、いまだ変わらず守られている所作とその心をお話できればと思います。そして、私自身のテーマとしてある茶道におけるおもてなしの意義ですが、茶道というのは何なのかというお話を少しさせて頂きたいと思います。

大変シンプルな事ですが、もし私が亭主として今日皆さんをお招きするという事であれば、今日の菓子だったらきっと皆さんが喜んでくれるのではないか、また旬の花を生け、支柱の山居、まるで山の中でお茶を一服召し上がっているような、そんな空間を作って差し上げるにはどうしたらいいだろうかと。あれやこれやと道具も含め、皆さんのお顔を思い浮かべながら考えます。そして、いざその日を迎えた時、路地に水を打ち、茶室は香を焚き浄化して皆さんをお迎えします。一種、挑むような心意気で皆様方に心を込めて最高のお茶を点てます。そしてまた、お客様方に満足していただけるよう、日々修練しているわけです。

何度も何度もこの型を体得する事によって、自然の生業の中で皆さんをお招きする事ができるようになります。茶の湯は長い歴史の中、明治維新以降、やっと女性が参加でき、そして教本ができた事によってルール化されました。しかし、教本は勉強と同じで記憶に頼ってしまいます。知識はもちろん大切です。しかし、記憶や知識だけでは人をもてなすことはできません。心で感じ、心でもてなす、双方が思い合うことによって感じる事ができるのです。

茶をしている者たちにとって、最も大切にしている利休七則という言葉があります。茶は腹の良きように、ちょうどいい塩梅でお茶を出しましょう、炭は湯の沸くように、花は野にあるように、そして刻限は早めに、降らずとも雨の用意、そして相客に心せよという七か条でございます。利休の弟子の一人が、茶の湯の心得とは何ですかと問うたそうです。それに対して利休はこの七か条を申したと言います。それに対しこの弟子は、「そんな事は私もよく存じています」と答えたそうです。その時、利休は、「この七か条を完璧に守ってもてなしをしてくれるのであれば、私があなただの弟子になろう」と言った逸話があります。言うは易しですが、行うのは難しい事です。だからこそホスピタリティとは何か、おもてなしとは何かという事をそれぞれの分野の方々がそれぞれの立場でお話し、体得していかなければいけないことなのだと思います。

先ほど先生方のお話の中にもあったように、一方通行ではいけません。亭主が心を込めて立てたお茶に対し作法が難しいとおっしゃる方もありますが、一つ一つの所作には意味があり、必要以上に言葉で表現せずとも通じ合うことができます。利休の教えの中に「習いつつ 見てこそ習え 習わずに よしあし言うは愚かなりけり」という言葉があります。批判をして頂いても結構です。しかし、まずお茶を一服召し上がって見てくださいという事です。

私は、利休居士から15、16代という家元にお仕えし多くの事を経験させて頂きました。そして今、私自身が海外に行く機会には、私自身が必ずさせて頂く事があります。それはその国々で道具を見立て、現地のお菓子を使い、抹茶と茶筌は日本から持っていき、もてなしをさせて頂くことです。

皆様、この中にはこれから海外に行かれる方たちもいらっしゃると思います。是非行かれる前に私たち日本の伝統文化としてお茶を体感、体験してほしいと思います。一服のお茶を通して、真のコミュニケーションが成立します。ここには国も、男女も、上下も関係ありません。

2000年にニューヨーク国連でミレニアム総会が行われた際、私も宗家のお手伝いとしてニューヨークに入りました。国連内に茶室を設え、ブレイクの時間に私どものお茶を全ての国の方々に差し上げたところ、韓国と北朝鮮の代表の方たちが、笑顔の中でお茶を召し上がっていただき、まさに一座建立、伝統文化による「おもてなし」ができましたこと、今でも鮮明に覚えています。これから皆様も海外に出て行き、そして海外からも多くの方がオリンピックもあり、これまで以上に訪れることと思います。そんな時にどうか、日本には素晴らしい伝統文化があるという事をお伝えいただき、そして先人の方々が大切になさってきた心でおもてなししていただければと思います。

取り留めのないお話となってしまいましたが、私どもの15代家元、今は千玄室様とお名前を変え92歳という御年で、今もなお一盃から平和「Peacefulness through a Bowl of Tea」を精力的に海外へ発信なさっておられます。おもてなしというのは、敢えて難しくする事でなく、双方が思い合い、そして双方が感謝をする、そこに尽きると思います。ぜひ皆様もお茶を頂くとき、そんな感謝を持ちながら一服を頂いてみてください。今日は本当にこのような機会をお与えくださりましてありがとうございます。ご清聴ありがとうございます。

### 「スポーツにおける性的マイノリティ」 松宮智生

スポーツ科学には、身体や動作、戦術などの研究以外にも、スポーツのあり方や社会との関わりについて考える人文社会科学系の研究領域があります。「スポーツとジェンダー」という領域もその一つです。「ジェンダー」とは、「文化・社会的な性」を意味します。多くの動物には雄と雌があって、姿・構造も違えば行動パターンも異なります。こういった「生物的な性」を「セックス」と言うのに対して、「文化・社会的な性」を「ジェンダー」と言います。文化・社会的な性という、例えば、やや古い表現ですが、男が外で働く、女は家で家事や育児をする、という言い方があります。またスポーツについて言うと、昔は、スポーツは男性がするものだと思われていました。こういった作られた男らしさや女らしさ、あるいは性役割がジェンダー、ひいては、性に関わる人権の問題となって現れてきます。

スポーツは、健康の増進や教育の機会になり得ます。自尊心やリーダーシップを育てる機会にもなります。また、女性の社会進出をサポートするなど、様々な良い点があると言われます。しかし、逆に、スポーツそのものがジェンダーに関する偏見とか不平等を再生産、あるいは助長している可能性もあります。例えば、スポーツは「男性中心主義の最後の砦」と表現されることがあります。近代スポーツはもともと筋肉的な活動ですので、筋肉量が多く、からだの大きい男性が中心になって行ってきたので、女性のスポーツ競技者が男性に比べて二流・亜流と見なされやすい領域です。

そして最近、スポーツにおける「性的マイノリティ」の人たちの権利が考えられるようになりました。「性的マイノリティ」とは、「性」あるいは「性別」のあり方が典型的ではない人たちのことを言います。「性」をめぐっては少なくとも3つの要素が考えられます。1つが「身体の性」、生物学的な性ですね。次に自分をどう思うかという「性自認」。そして3つ目はどちらの性を好きになるかという「性的指向」です。これら3つの要素について、それぞれマジョリティ（多数者）とマイノリティ（少数者）がいます。

まず「身体の性」について言いますと、身体が男性、あるいは女性で間違いないという人たちが多数者ですが、インターセックス（間性、半陰陽）の人たちもいます。それから、「性自認」につ

いては、多数者は身体の性と心の性とが一致していますが、それらが一致しないトランスジェンダーの人たちがいます。「性同一性障害」「性別違和」という言い方もあります。それから「性的指向」は、どちらの性を好きになるかということですが、多数者は異性愛（ヘテロセクシャル）ですけれども、同性愛や両性愛の人たちもいます。

これらの性のあり方を類型化すると、少なくとも12種類、細かく分ければ無限の種類があります。身体が男性であれば、心も男性で女性を好きになる、それから、身体が女性で心も女性で男性を好きになる。このような典型的な人たちが多数（9割以上）であるため、非典型的なマイノリティの人たちは「周りにはいない」（存在しない）と思われがちで、存在が不可視化されてきた歴史と現状があります。

スポーツの世界の話をしみますと、少し古い例ですが、女子プロテニス選手のレニー・リチャーズというトランスジェンダー選手の例があります。彼女は41歳まで男性でしたが、性別適合手術を受けて女性になり、全米女子オープンへの出場を申し込んだものの、出場を拒否されるという出来事がありました。結局、彼女は裁判に訴えて勝利し、その後5年間、全米女子オープンに出場できたという事例です。その後、身体の接触がないスポーツを中心に、トランスジェンダーのアスリートが徐々に活躍できるようになってきていますが、現在でも、スポーツの世界には、トランスジェンダーや同性愛者であることから、差別を受けたり、精神的な負担を強いられる例が多く見られます。

昨年、文部科学省が学校における性同一性障害に対する対応の調査をしました。学校の教育現場でも性同一性障害などの性的マイノリティの生徒に対する配慮の必要性が徐々に認識されるようになりました。

スポーツとジェンダーという研究領域では、藤山新さんという方が中心となった研究グループが、昨年、日本の体育・スポーツ系関連学部にも所属する大学生に調査を行いました。今日はその調査をご紹介します。

調査対象の学生のうち、男性が53.2%、女性が44.4%。そのうち身体の性別と心の性別とが同一な人は95.4%ですが、身体の性別と心の性別に違和があると自覚している人が2%弱（1.7%）いることが明らかになりました。それから性的指向については、異性愛が9割（90.4%）ですが、同性愛が3.3%、両性愛が2.8%います。

この調査から、スポーツ関連の学生の中には性的マイノリティが7～8%存在するということが明らかになっています。だいたい13～14人に1人の割合になりますから、周りには確実に性的マイノリティの人がいるはずですが、しかし、身近に性的マイノリティがいるかどうかを問うと、「いる」と回答した人は全体の3分の1（32.6%）程度でした。しかも、男女間では著しい結果の違いが現れました。女性の場合は、約半数（51.3%）が身近に性的マイノリティが「いる」と答えましたが、男性は6人に1人（16.8%）しかいませんでした。この結果からは、特に男性のスポーツ領域においては性的マイノリティの存在が不可視化されていることがわかります。

この調査では、性的マイノリティに対する感情や知識についても併せて調べています。ホモフォビア（同性愛に対する嫌悪）については、男性のほうが同性愛者への嫌悪感が強いということが明らかになっています。また、トランスフォビア（性別違和に対する嫌悪）についても、やはり男性の方が嫌悪感が強いことが明らかになっています。さらに、性的マイノリティに関する知識につい

て見ますと、ここでもやはり、男性の方が女性に比べて知識が少ないという結果が出ています。

この調査からは、特に男性のスポーツ領域においては性的マイノリティが不可視化されていること、それから、ホモフォビアおよびトランスフォビアに関しては、男性の方が嫌悪感が強いということ、さらに、性的マイノリティに対する知識レベルは男性の方が低いという結果が現れています。これらのことからだけでは断言はできませんが、知識や情報を得ることでフォビアを弱められる可能性があるのではないかと考えられます。正しい知識と情報の獲得、嫌悪感の軽減、性的マイノリティ当事者の負担の軽減、そして当事者の可視化、これらは互いに関連し、好影響が循環する可能性も考えられます。どのような知識・情報がフォビアを弱めるか、そういった研究がこれから必要になってくると思います。

### 「ホスピタリティとは？（学習すべき対象、あるいは既に持ち合わせているもの？）」

#### ウルサ・テスリッチ・コージ

私はスロベニアという国の出身ですが、恐らく皆さんはスロベニアをご存知ないと思います。まさに今日の主題のホスピタリティを考えた時、私の国は非常にホスピタブルな国であると思います。

ウェルカミング、ウォーム、ジェネラス等々、ホスピタリティの同義語だと思われる言葉を私は25個見つけることができました。お気づきかと思いますが、全て非常にポジティブな意味を持っている言葉です。つまりホスピタリティというのは非常にポジティブ、あるいはポジティブな印象を与えるものだと考えます。ホスピタリティを感じたり提供したりする時には、お互いに何か幸せを感じているのではないかと思います。相手が良い感じを持っていない場合には、恐らくそれはホスピタブルな関係ではありません。

我々は価値観を持っています。何が正しいことで、何が良くない事なのかという基準をきちんと持っています。一方で文化があって、文化は我々が何をすべきかを問いかけます。文化とは外に存在するもので、価値は家族の中で培われて行くものではないかと考えます。つまり、私の意見としては最もホスピタブルな時というのは、価値観と文化が結びついた時ではないかと思います。ホスピタリティを発揮するときは何か理由があると思います。要するに私は、ホスピタリティは相手を良い気持ちにさせることではないかと考えます。

私が生まれたスロベニアはヨーロッパの中央に位置しています。人口がたった200万人のとても小さな国です。過去にはユーゴスラビア連邦の一部でしたが、1991年に独立国となりました。旧ユーゴスラビア連邦はクロアチア、セルビア、ボスニア、モンテネグロ、マケドニア、そしてコソボに分割されました。スロベニアではスロベニア語、クロアチアではクロアチア語とそれぞれの言葉、小さい国がそれぞれ独自の母語を持っていますので、ほかの国の人々とお話をするためには、どうしても共通言語としての英語が必要になります。もちろん、ホスピタリティという視点からも外国語を学びます。それによって、外国の方を受け入れやすいということがあります。現在のヨーロッパの難民問題においても、近隣諸国では、現時点でスロベニアだけが唯一通過のための入国をほぼ無条件で許しています。そして彼らは、スロベニアを通過してオーストリアに向かいます。

日本も非常に安全な国だと世界的に評価されていますが、世界のランキングでは日本が7位でスロベニアが8位と、スロベニアも日本に次いで非常に安全な国です。対角線で端から端まで車で2時間あれば行けます。例えば、山へ行ってスキーをしてお昼には町の中心でランチをし、夕方アド

リア海で泳いで温泉もある、それを一日で全て楽しむことができます。多文化社会であり、いろいろな宗教、いろいろな民族がいて、世界的に有名な川や湖もあります。国立公園もあり、生物多様性という視点からもヨーロッパで注目されている国です。

最後に、ホスピタリティというのは、もてなすことで相手に心地よく感じてもらうことではないかと考えます。もてなされた人たちは、あなたが言ったことや、してあげたことは忘れるかもしれませんが、でも、恐らくあなたが彼らをどういう気持ちにさせたかということについては忘れないと思います。

これは私のモットーですが、関係性というのは常に「人対人」であるべきです。つまり私がスロベニアから来たとか、相手の人が日本の出身だとかいうことは関係なく、相手の人をどのようにもてなしたかが大切だと思います。私が皆さんにぜひ一緒に実践してもらいたいのは、毎日誰か一人を必ずスマイルにすることです。そうすることで、ホスピタリティがいろいろなところに浸透していくのではないかと思います。ご拝聴ありがとうございました。

### 【ディスカッション】

#### 大森節夫：

先生方のご講演を聞いて、皆さん、ホスピタリティの多様性というものを感じられたと思います。それでは、これからディスカッションを始めたいと思います。梶原先生、よろしく願いいたします。

#### 梶原：

会場の皆さん、コメントやご質問がありましたらお願いいたします。

#### 柴田：

お話を伺って感じたことは、ホスピタリティは、人間に対する優しさに尽きるということです。人間は誰でも自分のことが大事ですが、その自己愛というものをほかの人に持っていったら、それで全てが解決するような気がします。僕は、教え子に、自分の命、他人の命、すべてひとつの命であると言っておりますが、今日はそれに通じることをお教えていただいたような気がします。

私どもは、たくさんの留学生を大学に迎えておりますが、「留学生」という言葉をなるべく使わないようにしたいと思っています。単なる「学生」であるということです。その学生それぞれに、言葉や食べ物の嗜好など、個性があるわけですが、基本的なところで同じように生きられればいいということだと感じましたが、いかがでしょうか。

#### 松宮：

「自己愛」や「自己肯定感」ということについては、他者との比較において自分がどれだけ優れているか、何が「できる」という考え方がスポーツにあります。しかし、「ホスピタリティ」は、他者がいて、その他者が何かに困っていたり、何かを欠落させている場面で自分に何が「できる」か、つまりそれに応答する形で自らが現われるのではないかと思います。同じ「できる」の語であっても視点は大きく異なります。これは「成長」と「成熟」の違いではないか。「ホスピタリティ」は、

---

人間が成熟するための条件でもあるように思えます。アスリート学生を見ている、スポーツだけをやっていても成熟できないんだ、ということであらためて考えたところです。

**ウルサ：**

自分がやってもらいたいことを相手にやってあげるとというのが、ホスピタリティの基本であるべきです。そのベースになるのが自己愛です。まずは自分のことを愛していなければ、相手のことも理解できません。自己愛さえあれば、自分がされたいように相手のことを扱ってあげることができます。それから、私も「外国人留学生」という言い方ではなくて、「学生」でいいと思います。

**泉水：**

私どもの家元も「外国から来た人」という言い方をしてはならないとおっしゃっています。お茶を学ぶ生徒は、留学生であるとか、どこの国から来たかということは関係なく一緒に学びます。私も、ボーダーをあえてつくる必要はないと思います。

**田中：**

日本の場合、外国人に対する無関心だけでなく、社会的弱者に対する無関心もあります。例えば、「障害を持っている人」というように、すぐにラベルを貼ってしまうところがあります。そうではなくて、人と人の関係性を当たり前のこととしてやっていけばバリアはなくなるのではないのでしょうか。

**安東：**

自己愛というのは、自分を肯定的に捉えられることです。それは家庭から生まれると思います。私も教育の仕事長くやってきましたので、社員教育をしていく中で、最終的には家庭だということを感じてきました。家庭で自分が愛されていることを実感できれば、何を愛することもできるということで、それが基準になっていくと思います。

**梶原：**

ホスピタリティとは際どい問題で、必ずしも平和にうまくいくとは限りません。確かに、ホスピタリティを上手にやることで、商業化されてお金をもらえるという面もあります。一方で、本来は自己犠牲を伴う無償の行為であり、お金にならなくてもいいというところもあります。それから、ホスピタリティがなくても世の中はなんとか動いていくところもありますし、そうはいかない部分も出てきます。

また、人のことを考え過ぎると、過剰サービスになりかねません。例えば、サービスがいき過ぎますと、相手が自分のことを分かりすぎていて怖いと感じさせることがあります。

他者は他者でありますから、その不安定な関係の中で関係を結ぶためにあるのがホスピタリティです。戦っている相手でもいいのです。敵と味方の関係は完全に解消しないかもしれませんが、例えば、お茶によって瞬間的にそこに友愛が生まれるということもあるわけです。

**(教員) :**

21世紀アジア学部の土佐昌樹と申します。お話を伺っていて、ホスピタリティやおもてなしの考え方の奥行きを感じました。ただし、奥行きが深いだけに結論を出しにくいところがあります。むしろ、あまり無理にまとめないほうがいいのではないのでしょうか。例えば性的少数者に対するもてなしの話と、お茶でもてなす話は、絶対一緒にできません。今日は、そこに何か結びつくものがあると感じることができただけでも十分だと思いました。

ホスピタリティというのは、サクリフェイスではありません。自己愛という利己的なものがあるからこそ、ホスピタリティも生きてくると思います。

**梶原 :**

素晴らしいご質問とコメントをありがとうございました。ホスピタリティというのは、結果として相手から何かいい反応が欲しいのですけれども、しかし結果を求めないということもあり、結論がなかなか出ないということがよく分かりました。

**(学生) :**

質問が二つあります。まず、相手をもてなすということに関して。日本に長く住めばわかるかと思うのですが、これは非常に形式的なものです。たとえば、私がスロベニアを訪れたとします。その場合、どのような「おもてなし」を受けることができますか？

**ウルサ :**

もちろん、その方がどういう立場の方かによるとは思うのですが。それでも、多くのスロベニア人は、質問を受けたら、どのように答えてあげたら役に立つのかということ我真摯に考えています。

**(学生) :**

もうひとつの質問です。それでも、相手の態度が悪く腹が立つ場面もあるかと思います。その場合は、どうなさるのでしょうか？

**ウルサ :**

相手の態度が酷かったとしたら、相手の態度の問題だと思います。不運にもそのような場面に出くわしたとしたら……胸のうちにしまい、その場をそっと去ることと思います。

**大森 :**

今日は皆さんにいいお話をさせていただきました。私が疑問に思っているのは、ホスピタリティのある人がこんなにたくさんいるのに、政治家にホスピタリティがないためか、いまだに戦争がなくならず、難民が出てくるということです。20世紀は戦争の時代といわれて、21世紀になったら平和になるのかと思いましたが、残念ながらいまだに平和になっていません。若い方には、テーマとして、ホスピタリティと共に平和を実現していただきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。